

ほろこい

小説北海道製作委員会

シカイの中心でIを鮭んだヒグマ

ホイップクリームが波打つケーキの上にチョコプレートが載せられていて、そこには「サハリンへようこそ！」と刻まれていれば愉快だが、現実にはカラマツトドマツの原生林の縦横に定規をあてずばつと切り裂いた直線道路がはるか群青の海まで突き刺さっているだけだった。

青黒く海藻ゼリーのように穏やかなオホーツク。そこに浮かぶ細長い島の北部一帯は、海拔が低い上におそろしく真つ平らで、起伏のある中南部を柄に見立てた刺身庖丁のように見えなくもない。タツノオトシゴ日本列島を、今まさに切り刻まんと振りかざされた刃。東西冷戦時代ならそう表現されたらう国境の島へ48人乗りの小型旅客機アントーノフ24が着陸の準備を開始していた。

パイロットのロシア語の演説に続いて、日本のアテンダントの軽く二倍の腰回りはあるロシア人

女性が座席を見て回る。俺は背もたれを元へ戻した。

隣の席は空いていた。最初乗り込んだとき、そこが俺の席だった。離陸間にシートベルトの金具が千切れてないことに気づき、慌ててロシア人女性に告げると「では、お好きなところへどうぞ」ロシア語でこともなげに言われたので横へ一つずれたのだ。搭乗時も荷物は機体のハッチを開けて、乗客が手分けして積み込むし、離陸後も隙間から真っ白い冷気がシューシュー音を立てて入り込んでくるし、アテンダントは二倍だし、本当に大丈夫か？ アエロフロート国内線という感じだったが、どうにかサハリン北部オハの空港に着陸することができた。

ハバロフスクまで国際線で5時間、さらに国内線で1時間。俺クリオネ・タカシはようやく頭上の島サハリンの大地に降り立ったのだった。

ちよつと待った。「俺クリオネ・タカシは……」って、降り立ったのはおれじゃないか。栗尾根の額からどわつと汗が噴き出してきた。「俺」って、おれか？ 勘弁してよ……。

このあと、主人公クリオネは他の日本人ツアー客二名とともに、民間に払い下げられた軍用ヘリで間宮海峡沿いの森林を切り開いて造られたキャンプ地へ飛び、ロシア人現地スタッフの歓待を受け、昼はイトウ釣りとなカイ狩り、夜は鯨飲に次ぐ鯨飲の一週間を過ごすのだがその反エコツアーにも飽いたころ、朝鮮族の通訳に「おもしろいオプシヨンツアーがあるが興味あるか？」とささやかかれ、一人六輪駆動車で内陸部の通称「駐屯地」へ案内される。そこは通常兵器のパラダイスでクリオネはカラシニコフ、手榴弾、RPGの、迫撃砲の試射を楽しむ。気前のいい日本人青年は駐屯地のボス「退役少佐」のテントに招待され「おまえは筋がいい」と誉められる。退役少佐はなぜか中日ドラゴンズの野球帽をかぶっていた。前にツアーでやってきた日本人にもらったのだという。

そいつも気前がよかった。今度来たときには戦車砲を撃たせてやると約束した。日本人は大好きだ。ナゴヤのカフェはパリを抜いて世界一というのは本当か？ キチメンとミソカスはそんなにうまいか？ 我がロシアの未来に。サハリンの発展に。二人でアルメニアの五つ星コンヤックで乾杯。

退役少佐は彼の話を用意するなら、元軍人で現在はマフィアの中くらいのボスで表の商売は北サハリンの天然ガス採掘関連。地方議会に籍を置いたこともある。投獄されたこともある。今実弾を使用するサバイバルゲームを企画している。日本人は好きだろう？ サバイバルゲーム。それゲームじゃなくて戦争じゃないですか、少佐。日本人よ、戦争もゲームだぞ。そんな話も尽きたころ、退役少佐は「無理には勧めないが」と前置きして一枚の写真を差し出した。

「これが私が扱っている一番高い商品だ」

金属製の道具箱のようなものの中に電子部品が詰まっている。退役少佐は自慢げだ。

「拳銃と手榴弾を買っていったヤクザに売ろうとしたが、使えないものはいらないと断られた」

写真を見ても何の装置なのかさっぱりわからなかった。クリオネは拷問マシンのようなものを想像した。ドクター・キリコの安楽死用超音波発信器に似ている気がしたのだ。

「すまない。わからない。これは？」

すでにクリオネの三倍は飲んでいた退役少佐は、一本立てた指をゆらゆら揺らしながらテントの天井へ向けた。腕を上げきったところで、掌をパツと開いて笑った。

花火のように見えたが、赤ら顔の退役少佐の口から漏れた音はヒロシーマ、ナガサーキと聴こえた。

栗尾根は無邪気な熊のように馬鹿笑いするロシア人を目の前から振り払った。退役少佐は蚊柱のように粒粒に分かれ飛び散り蒸発した。栗尾根からも粒子が蒸発、クリオネらしさが消えただの栗

尾根に戻った。場面と同じようにテントの中にいるせいか、いつもより簡単に憑依してしまう。企画書から目を離れた。ヘッドランプの円い光がテントの内側をさまよい歩く。今年のグランプリに決定した保温ボトルの口を開け、残りのコーヒーをマグカップへ注いだ。一口飲んだ。

おそらくあとの展開はこうだ。ロシアから直接国内へ持ち込むのは無理なので、物の受け渡しは北海道。小樽か稚内か網走。まあ網走だろう。ロシア船から運び屋のセルゲイがゴムボートで上陸。スーツケースを手には網走湖畔か天都山へ向かう。

「カカヤ・エータ・ルイバ？」
「ガルブーシヤ」

合言葉を確認。

「エータ・スヴエニール・アト・メニヤー」
「スパシーバ」

セルゲイからずつしりと重いスーツケースを受け取る。開けると半年前に見た写真と同じ装置が詰まっている。

セルゲイに紙包みを手渡す。中身は日本円で二百五十万円。二億五千万から値切って値切って値切って百分の一になった。そのかわり不発弾を掴まされた可能性は高い。

交渉成立。

ダスビダーニヤー！ と叫びながら自転車で天都山展望台から滑り降りていく運び屋セルゲイ。その自転車は網走市内で拝借したものだろ。そのまま船に積んで持ち帰るかもしれない。九十年代なかば道内ではロシア人による自転車盗難事件が頻発していた。港に密輸のカニを降ろし、代わり中古の自転車を積み込むのだ。放置自転車を持って行くうちはまだよかったが、家の前に止め

てあるものまで積み込みはじめたので網走市民は戦々恐々。ロシアを見たらず転車ドロボーと思え。返せ北方領土とママチャリ。標語こそなかったがそんな状況だった。

あのころロシアは民主化の煽りで国内はぐちゃぐちゃ。極東サハリンで何が起きようと誰も知ったことではない。リアリティは認めよう。しかし、自分にこんなピカレスク？ ポリティカル？ が務まるのか。「アエロフロード」「軍用ヘリ」の文字だけで冷や汗をダラダラかいているおれに。

栗尾根はヘッドランプを消して、企画書を閉じた。コールマンの1〜2人用テントの中はランタンの淡いオレンジ色の光だけになった。腰まで突っ込んで体育座りをしていた寝袋を肩まで引き上げエアマットの上にごろんと転がった。「太陽を盗んだ男と24シーズンをミックスしたような話です」チーム網羅はそうメールしてきた。どちらも未見だが、こんな話なのだろうか。「クリオネさん大活躍の大活劇なんだけど、皮肉が効いているというか……とにかく自信作です！」「確か、スターウォーズではアナキンがお好きだったか。今回はクリオネさんの暗黒面、ダークな魅力を引き出せたら、と思います。黒尾根（汗。。）さん、よろしくです」こちらこそ。

「チーム網羅」は四人組の創作集団。これで5作目だった。普段はそれぞれ高校教師（商業科）、小麦玉葱農家、稲作農家兼喫茶店経営、役場から観光協会へ出向中。地元に行ったときも会ったことはないがなんとなくわかる人たちだ。四人中三人が地元の劇団「アイスマンスター」で役者もこなす。四人の自宅が網走市内、知床・羅臼町に点在しているため「チーム網羅」わかりやすい人たちだ。

彼らもこちらのことを一般の道民よりはよく知っている。自分が扱った事件はすべてフアイリングしているようだ。その上で書き上げた前4作。「利尻コンブ絞殺魔事件」「しれとこのみさきにはまなすのさく頃に、事件」「小樽ウニカニイクラウニカニイクラ……ときどきトロ殺人事件」「屈斜

路湖クツチャロ湖クツタラ湖連続水死事件」栗尾根はガチの本格推理は苦手だと分析した結果の北海道ユーモアミステリー。名所巡り入り。正しい判断。

文章、展開、会話、悪くない。魅力的なキャラクター。髪型とファッションをもうちょっと勉強（自分が）すればクリアーできる。でも、なぜ事件は北海道でしか起きないのか。自分を故郷へ引き戻そうとしているかのようだ。手の込んだ嫌がらせなのか。いやいや彼らは本気だ。本気で自分を応援してくれている。でなければこんな熱心に投稿してはこない。自分をサポートすることでの自分の自己実現も叶うのだ。4作目の返事に「北海道以外の土地も踏めたら幸いです」とメールをしたら、早速5作目を送ってきた。そして出て来たのがロシア、サハリン。いや、そっちじゃなくて……なぜ西へ来ない。

今回自分の役どころは、大量破壊兵器を手に入れ、爆破する対象を求めて道内を徘徊する若きテロリスト。目的はテロのためのテロ。破壊のための破壊。ちよつと豪華な花火大会。自分が「探偵」でないことには驚かされた。個人的な動機で動いている点は評価できる。

「……と、できているのはここまでです。もしお気に召しましたら、つづきを書かせて頂きます。なお爆破するターゲットは次のうちからお選びください。それによってストーリーが微妙に変わります。

- ①北海道庁
- ②時計台
- ③苦葉博士の銅像
- ④五稜郭タワー
- ⑤鯨御殿（数あるうちのどれか一つ）

⑥ 網走監獄博物館

⑦ 五郎の石の家

⑧ その他

※北海道まるごと全部（笑）とかは無理ですが、ご自由にどうぞ

道庁爆破は昔あったし、時計台はしょぼい、五稜郭行ったことない、鯨御殿って意味あるのか？博物館は市の重要な収入源、五郎の家を壊しても嫉妬としか思われない、となると残るは銅像。

苦薬博士は通称で本当は「新渡露苦薬博士」が正しい。植物学の泰斗にして札幌農学校の創設者。北海道近代化の父。「少年よ、大麻を吸うな 麻を編め」明治時代、開拓の切り札として道内で広く栽培された大麻。しかし繊維をとるための作物を吸引する者が続出、開拓の息吹が危うくなったとき敢然と立ち上がった博士の功績は大きい。

北海道に自生する大麻はもともと五稜郭に立て籠もった榎本武揚が共和国政府の財政に役立てようとロシアから持ち込んだという説がある。榎本はアイヌ人を薬物依存へ追い込み、陰で強制労働を行わせていた。いつの時代も反政府ゲリラは手っ取り早く麻薬に手を染め少数民族を使い捨てる。それを土方歳三が非難。共和国と袂を分かった土方がアイヌ人酋長らとともに道東で蝦夷幕府を開こうとしていた矢先、榎本はロシアを仲介に明治政府と密かに和解。道の利権を独占するたぬ土方を暗殺。五稜郭で形ばかりの抵抗を示したのち降伏。恩赦後は颯爽と表舞台へ再登場。ロシアをうしろ盾に新政府の要職を歴任しながら北海道を陰で操り続けた。

その影響は現代の政治にも暗い影を落としていて、中川一郎の自殺、鈴木宗男の失脚、鳩山兄弟の確執となって表に現れている。という滅茶苦茶な話を送ってきた人がいた。

ある意味素晴らしい歴史ミステリーだったが、このチーム網羅の話と合わせるとどうだろう。大

麻から見た北海道というのは新鮮かも。殖産興業と近代という両義性のある植物。榎本ロシアと土方アイヌ。苦業博士の苦惱。両義性を支えきれず命を絶った北海のヒグマ。仔熊中川昭一と元第一秘書鈴木宗男。鳩山一族と石橋製菓「黒い恋人」。何か北海道が大雪山あたりで真つ二つに割れそうな、凶暴な想像力がみなぎってこないか。

経済成長の時代は終わり、草がコミュニケーションになった今、博士が丘の上から牧場に屯する羊たちへ「少年よ……」と叫び続ける意味もなくなった。いらなくなった博士を客寄せ羊もろともロシアのケータイ核で吹き飛ばす。それが北海道開拓という物語に相応しい終わり方なのかもしれない。

これ、いけるんじゃないか。栗尾根はエアマットから身を起こした。登場人物がジ紙ヨイント巻でジヨイント。革命なき時代の核メエ。いけそうだ。いけるいける。ヘッドランプをつけて狭いテントの中を探し始めた。あの歴史ミステリー、どこいったつけ。まだ捨ててはいないはずだが。

ヘッドランプの円い光が虫のように飛び回る。歴史ミステリーは調味料入れの下敷きになっていた。あつたあつたこれこれ。栗尾根は醤油かコーヒーの茶色い染みがついている紙の束を引っ張り出した。

《《有名になるためなら手段を選ばないってわけね》》

栗尾根は凍りついた。右肩の「ぷに」だけが元氣よく蠢いている。

《《タカシ……》》あんた、いつから犯罪者になったの》》

向こうからカーブを曲がってきた車のライトがテントを照らした。黒く大きなひとがたが映し出された。腰に手を当て仁王立ちしている。恐る恐る入口のファスナーを引き上げた。

「羊がかわいそうじゃない。呆れた男だね、まったく」

栗尾根がテントから頭を出して上目遣いで見ると、ヘッドランプの光が白い生足と短いチェック柄のスカートを映し出した。漆黒の闇の中に浮かび上がる夏服。大きな目と濃い眉毛。ふくらはぎまで届く長いポニーテールが夜風に揺れている。

「蘭ちゃん……」

探偵「栗尾根^{くりおね}天士^{てんかし}」の助手「室蘭蘭^{むろらんらん}」の登場だった。

「ちよつと、眩しいじゃない」

入るわよ、と栗尾根をテントに押し込み蘭も中へ入ってきた。

「ここがよくわかったね。初めてのキャンプ場だからメールしようと思ってたんだが」

「あなたのいる場所くらい、目つぶつてもわかるわよ。っていうか、眩しいって！」

「あ、ごめん」栗尾根は慌ててランプを消した。

蘭はひとり分しかないエアマットの上に胡坐をかいた。栗尾根は体育座り。二人はランタンを挟んで向かい合った。淡いオレンジの光にあまり出された少女はまだご機嫌斜めで太い眉毛を寄せ口元を尖らせていた。明るく澆刺としておるときよりも、突いたら暴発しそうなこの表情が人気の源だった。北海道では。

「コーヒー飲む？」

「いらない」

「お腹は？ 塩ラーメンならすぐできるけど」

「結構。赤坂でステーキ食べてきたから」

「ステーキか……」栗尾根は牛肉をしばらく口にしていないことを思い出した。最後に食べたのは、あれか。青年会議所主催の送別会。オホーツクを見下ろす丘の上の牧場レストランで食べた牛乳ス

キ焼。半年も前のことだ。

「お肉は最高級、だけどプロデューサーが最悪。エロメガネ禿げ。最終候補に残してやるから、「な、な、いいだろう？」……フォ、フォークで刺して切り刻むぞ、ゴラッ」

突き出された拳に栗尾根は思わずのけ反った。「ゲ、芸能界も大変だな」

「エロメガネ禿げはどうでもいい。ねえ、タカシ。あたしの名前って、どうなの？」

「名前？」蘭の眉から力が抜けた。自信を失いかけているサインだ。

「別の審査員に言われたの。再出発するなら芸名変えろって。室蘭じゃダメだって。じゃあ何？東京蘭？」

「おれは蘭ちゃんのに「室蘭蘭」好きだけどね」

「ありがとう」蘭が初めて微笑んだ。でも眉毛はそのままだ。

蘭を最初にスカウトしたのは栗尾根だった。当時蘭は十四歳。まっとうな自己主張を自己チューと曲解され、この世に居場所がなくなった彼女は網走市立図書館で熊の本ばかり読んでいた。栗尾根は観察から彼女の置かれた状況を察知、埋もれさせておくには惜しいルックス（特に眉毛）と名前（図書カードで確認）から、名刺を渡し、開いたばかりの事務所に遊びに来るよう誘ったのだ。そこからの活躍は記すまでもないだろう。その後待ち受けていた躓きも。

「タカシは？ 名前を変えようと思ったこと、ない？」

「それって、おれじゃなくなるってことだろう。ないね。ない」

「すごい有名なミステリー作家が「君をぜび、わしの作品に……」とかでも？」

「それ誰だよ。うん。おれに「栗尾根天士」以外の名前があるとは思えない。それぐらい名前ってのは重要だ」

「そうかな」

「そうさ。おれの半分は「栗尾根天士」という名前でできている。もう半分は推理力」
蘭の眉はまだ水平やや下向きのままだ。